物乞いの組織化によるエンパワメントの可能性
―― グラミン銀行「物乞自立支援プログラム」――

松　井　範　惇　　坪　井　ひろみ
Noriatsu MATSUI　　*Hiromi TSUBOI*

要　旨

バングラデシュにあるグラミン銀行は，2003年，物乞いの組織化に着手した。本稿の目的は，物乞いに少額融資を提供し，準メンバーとして彼らの組織化を図るグラミン銀行が，「物乞自立支援プログラム」を通して，物乞いをどのようにエンパワーさせることができるのか，その可能性を考察することである。

本稿では，まず，「物乞自立支援プログラム」の目的，現状，特徴，組織化を概観し，次の第2節で，筆者の調査に基づき，物乞いの生活状況とグラミン銀行とのかかわりを整理する。第3節で，物乞いのエンパワメントの可能性を，①融資がもたらす可能性，②センター集会がもたらす可能性，③身体に障害のある物乞いにもたらす可能性，の3つの側面から考察し，最後に，「物乞自立支援プログラム」の意味とグラミン銀行の開発における役割を述べる。

はじめに

バングラデシュにあるグラミン銀行は，グラミン銀行の準メンバーとして，物乞いの組織化に着手した。グラミン銀行は，貧困層を慈善の対象としないという考え方をもち，それを物乞いについても貫いている。その根拠は，施すという行為は物乞いの尊厳および自活の意欲を奪うことであり，長期的にも短期的にも現実の問題の解決にはならないという信念にある［Yunus and Jolis 1998, pp.22-23］。

人々を開発する手法はさまざまである。例えば，バングラデシュ最大のNGOであるBRAC[1]は，開発理論の根底にパウロ・フレイレが概念化した「意識化」[2]を据えている。スリランカにおけるサルボダヤ運動は，仏教に基づき，物の開発と心の開発を促している[3]。インド北西部のアーメダバードにあるSEWA（Self Employed Women's Association：自営女性労働者協会）は，ガンジーの理念と実践を労働組合活動に取り入れている[4]。そして，グラミン銀行は，資金を媒介として貧困

1) BRACは，Bangladesh Rural Advancement Committee（バングラデシュ農村振興委員会）の略語であったが，これを組織名として現在使用している。BRACの活動の詳細については，ラヴェル（久木田・久木田訳）（2001）を参照。

2) パウロ・フレイレ（Paulo Freire, 1921-1997）は，ブラジル生れの教育実践者である。彼は祖国ブラジル，チリ，ギニア・ビサウなどにおいて，被抑圧者に対する成人識字教育を実践した。彼の教育の最重要概念は，被抑圧者自身が対話と学習を通じて彼らの状況を認識し，その状況を自覚的，主体的に変革していく過程，すなわち「意識化」である。詳細は，フレイレの代表的著作『被抑圧者の教育学』を参照。なお，BRACは，フレイレの意識化をバングラデシュの農村に応用し，貧困層が自らの置かれた状況とその理由を認識できるような方法論を学び，技能を獲得することを主眼としている［ラヴェル（久木田・久木田訳）2001, p.65］。

3) 民衆主体の開発運動であるサルボダヤ運動の詳細については，野田（2001, pp.61-91）を参照。

層を開発しており，その手法は簡単明瞭かつ原則的である。

本稿の目的は，物乞いに融資を提供し，準メンバーとして彼らの組織化を図るグラミン銀行が，「物乞自立支援プログラム（Struggling Members (Beggars) Programme)」を通して物乞いをどのようにエンパワーさせることができるのか，その可能性を考察することである。これまで絶えることなく続けられているグラミン銀行に対する批難，疑念のひとつは，社会の最貧困層，貧困の中の貧困層を対象としていないのではないかというものであった［中村1999, pp.134-164］。これに対し，時に無視し時に反論しながら，グラミン銀行は当初からの信念に基づき活動を拡大してきた。本稿は，社会の最貧困層の一部をなす物乞い[5]のみを対象とすることで，これまでの批判，疑念に対する明確な反論姿勢を示すグラミン銀行の，古い問題に対する新しいプログラムを分析するものである。

本稿の構成は次の通りである。第1節では，「物乞自立支援プログラム」を概観し，第2節で，筆者の調査に基づき，プログラム・メンバーとグラミン銀行とのかかわりを明らかにする。第3節で，プログラムが物乞いにもたらすエンパワメントの可能性を考察し，最後に，本稿の結論を述べる。

第1節　「物乞自立支援プログラム」の概要

グラミン銀行は，パイロット期間を経て，さまざまな理由（夫との離婚や死別，夫や他の家族からの遺棄，失業，身体障害，自然災害など）により物乞いを生業としている人々を，グラミン銀行の準メンバーとすることに着手した。2003年後半に開始された「物乞自立支援プログラム」がそれである。

まず，Yunus［2004］および『グラミン銀行年報告書2003』［Grameen Bank 2004, p.16］を参照しながら，目的と現状および特徴を整理する。次に，筆者の調査に基づき，物乞いの組織のしかた，および彼らの組織内における位置を示す。

1．プログラムの目的と現状

このプログラムの目的は，物乞いが尊厳のある暮らしを知り，将来的にはグラミン銀行の正規メンバーとなるために，金融サービスを提供することである。このことは，グラミン銀行の主張，「クレジットは人権である」の一層の徹底を図るものである。

先述のBRACは，バングラデシュ政府および世界食糧計画（WFP：World Food Programme）との共同プログラムにおいて，最貧困層の中でも最も脆弱な女性に対し，期限付きの小麦粉支給という生活保護と職業訓練を与え，彼女たちの組織化を図っている[6]。したがって，女性の物乞い（季節的，地域的要因で物乞いをする場合も含む）が，BRACのプログラムに含まれている可能性はある。しかし，グラミン銀行のこのプログラムは，物乞いそのものがターゲット・グループであり，さらに慈善の対象ではないという意味において，

4）SEWAが貧困女性にどのようにエンパワメントをもたらしているかについては，甲斐田（2001, pp.149-173）を参照。

5）マルクスの『資本論』によれば，物乞いは「相対的過剰人口の最下層の沈澱物」，すなわちルンペンプロレタリアートであり，「受給貧民（公の生活保護をうけて露命をつないでいる貧民）」の一部を成す堕落したもの，零落したもの，労働力のないものである［マルクス（大内・細川監訳）1968, pp.838-839］。したがって，物乞いは，プロレタリアートの周辺にいるルンペンプロレタリアートのなかでも最外周に位置する。

BRACのそれとは明らかに異なる性質をもつ。表1に，プログラムの各時点における現状を整理する。

1人当たりの融資額は500タカで推移している一方，メンバー数は急増している。これは現場レベルの意見の反映である。すなわち，グラミン銀行は当初，プログラムの参加者数を各支店2名程度としていたが，現場の行員からメンバー数の増加要請があり，それを受けて規模を拡大してきた経緯がある[7]。2005年5月現在，プログラムはバングラデシュ全土で実施されており，プログラム・メンバーの貯蓄額は184万タカである［Grameen Bank 2005］。それは，1人当たりでは42タカ（約84円）でしかないが，貯蓄の存在そのものに大きな意味があると考えられる。表1の最右欄から分かるように，累積返済率は着実に上昇している。

表1　プログラムの各時点における現状

	メンバー数（人）	累積融資額（タカ）(A)	累積返済額（タカ）(B)	物乞をやめ正規メンバーになった累積数（人）	累積返済率（%）*
2003年12月	1,478	78万	16万	－	20.5
2004年 7月	14,500	719万	191万	69	25.6
2004年 8月	17,647	910万	260万	87	28.6
2005年 5月	43,490	2,708万	1,210万	226	44.7

（注）＊筆者計算（(B)/(A)×100）。
（出所）2003年12月は，Grameen Bank [2004, p.16]。2004年7月は，Grameen Trust [2004]。2004年8月は，Yunus [2004]。2005年5月は，Grameen Bank [2005]。

2．プログラムの特徴

プログラムの主な特徴は，以下に示す通りである。

①グラミン銀行の規則は，プログラム・メンバーには適用されない。例えば，彼らは5人グループを形成する必要はなく，センター集会に参加する義務もない。週ごとの貯蓄および返済をする必要もない。プログラム・メンバーが自らの状況に合わせて，融資に関連することおよび集会の出欠などを決定することができる。

②融資は無担保，無利子で，上限額は2,000タカである。典型的な融資額は500タカである。物乞いで得たお金を返済に充ててはいけない。

③プログラム・メンバーに対し，本人の顔写真入り名札を身分証明用に発行する。この名札にはグラミン銀行のロゴマークが付いており，彼らを後方から支援している。プログラム・メンバーは，グラミン銀行と協定した地元の商店から，一定額までクレジットで自分

6）BRAC，バングラデシュ政府，世界食糧計画との共同プログラム「IGVGD（Income Generation for Vulnerable Group Development：脆弱な人びとを開発するための所得創成）」は，最貧困層の中でも最も脆弱な女性（夫や家族から遺棄された，あるいは夫と離婚，死別した女性で，子どもを抱えている人が大半である。）を対象とし，2年間にわたり月30キロの小麦を支給している。この間，家禽，ヤギ，牛の飼育方法および野菜の栽培方法を訓練し，その後，女性が訓練を活かしたビジネスを開始する際には，ローンを提供している。IGVGDプログラム・メンバーは，末端の行政機関であるユニオン（村）評議会が決定する。その際，認定から漏れる女性もいる。2001年1月から2002年12月までのメンバー数は287,350人である。［ラヴェル（久木田・久木田訳）2001, pp.89-92およびBRAC 2003, p.20］。

7）2005年1月26日，東京大学COE Frontier Economics Lectureにおけるムハマド・ユヌスの発言。

が売れそうな商品（パン，キャンディ，ピクルス，おもちゃ，マッチ，きんまの葉など）を買い，それらを村で売ることができる。商店に対する代金の返済については，グラミン銀行が保証する。

④プログラム・メンバーは，掛け金なしで自動的に生命保険に加入でき，さらに，家族の埋葬費用として500タカが提供される。

⑤プログラム・メンバーに対し，物乞いをやめることは要求しないが，他の方法による収入獲得を促す。

⑥毛布，ショール，蚊帳，傘などを購入するための融資を無利子で提供する。

3．物乞いの組織化

1990年代初頭，タンガイル県の村において実施された物乞いに関する文化人類学的調査によると，男性の物乞いは，賃金労働ができないのであれば物を乞うことが認められるという社会的了承を得ており，世俗の物乞いではあるが宗教的役割を担っている。一方，女性の物乞いは，社会的に認められず，宗教的役割もない［西川2001, pp.248-257］。グラミン銀行は，この調査が指摘する物乞いの宗教的役割については触れず，彼らの社会における位置についてのみ言及している。すなわち，彼らは社会の周縁で暮らしているという認識である。そのような彼らの組織化は，まず彼らを探し出すことから開始される。以下にその手順を示す[8]。

①支店の活動村に住む物乞いを探し出し，人数を把握する。この業務には，一般行員があたる。

②物乞いに接触し，物乞いになった理由および現在の生活状況を把握する。

③グラミン銀行の活動を伝えるため，センター集会の見学を勧める（正規メンバーが近隣の物乞いを集会に連れてくる場合もある）。

④センター集会において，物乞いに対しては活動の実際を説明し，ローンの使い方をアドバイスする。正規メンバーに対しては，彼らを社会に組み込む重要性を伝える。

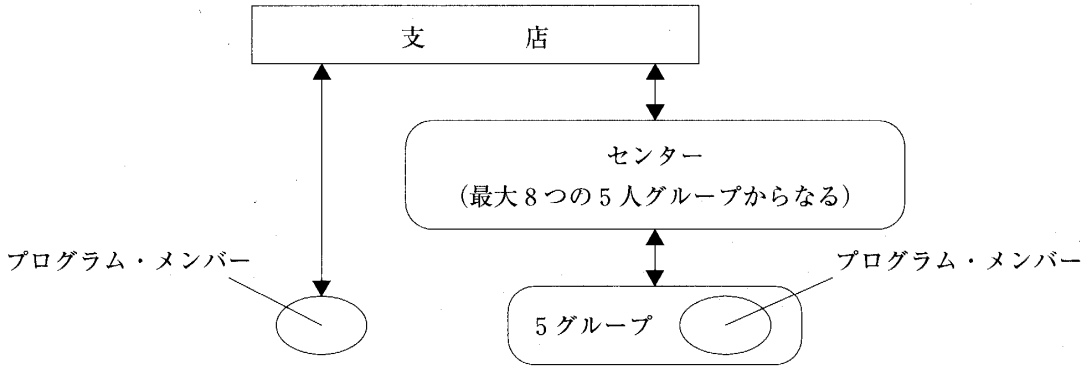
⑤支店において，出向いてきた物乞いに対して生活上の助言をし，希望すれば融資を行う。この時点で，プログラム・メンバーとなる。

4．プログラム・メンバーの組織内における位置

グラミン銀行を構成する正規メンバーの共通目的とは，貧困削減であり，彼らはその実現のために，およそ30年にわたり集団活動に参加してきた。物乞自立支援プログラムのメンバーは，目的において違いはないが，参加のしかたには正規メンバーと異なる点がある。それは，上述のように，彼らは自らの状況に合わせて，このプログラムに柔軟にかかわることができることである。グラミン銀行から融資を受けるだけという形の参加もある。あるいは，融資を受け，さらに5人グループに6番目のメンバーとして暫定的に加入し，週ごとのセンター集会に参加することもできる[9]。図1に，プログラム・メンバーの組織内（支店レベル）における位置を示す。

8）物乞いの組織化の手順は，2004年3月に行われた，グラミン銀行ナゴリカリゴンジ支店（ガジプール県）の支店長および一般行員に対する筆者のインタビューに基づく。

図1　プログラム・メンバーの支店レベルにおける位置



(出所) 筆者作成。

第2節　プログラム・メンバーとグラミン銀行とのかかわり

1．調査の概要

調査の目的は，プログラム・メンバーである物乞いが，彼らの生活のなかで，グラミン銀行とどのようにかかわっているかを明らかにすることである。調査地は，タンガイル県にあるグラミン銀行ドゥバイル・デルドゥワイ支店の活動村のひとつであるドゥバイル・ドッキン村である。調査は2004年11月に行われた。ドゥバイル・デルドゥワイ支店には7人のプログラム・メンバーがいる。そのうち，ドゥバイル・ドッキン村に暮らすプログラム・メンバーは，女性2人である。調査対象者をこれら2人の女性物乞いとし，面接聞き取り調査が実施された。

2．調査の結果

表2に，プログラム・メンバーの現在の生活状況，およびグラミン銀行とのかかわりを整理した。

第3節　エンパワメントの可能性

貧困層を対象とするが彼らは慈善の対象ではないというグラミン銀行の哲学が，物乞いを組み込むに至ったのは必然の結果である。グラミン銀行は，貧困削減のための社会組織として，マルクスをして最も組織化に馴染まないといわせた前人未到の領域に踏み込んだ。このことは，グラミン銀行という壮大な社会実験がその最終段階に入ったのではないかと考えられる。

物乞いの組織化プログラムの導入について，ムハマド・ユヌスは，ここに至るまでのおよそ30年間で，グラミン銀行が組織として成熟したことにより可能となったと説明する[10]。すなわち，このプログラムは，第1節で述べたように，コストの面（無利子であることなど）では自己完結的ではないが，これをカバーできるだけの余裕（能力，資金量）がグラミン銀行自体にできてきたということであろう。実際，融資額が無制限というマイ

9) 物乞いとグラミン銀行とのかかわり方は，2004年11月に行われた，グラミン銀行ドゥバイル・デルドゥワイ支店（タンガイル県）のセンター集会における筆者の観察に基づく。

10) 2005年1月26日，東京大学COE Frontier Economics Lectureにおけるムハマド・ユヌスの発言。

表2　プログラム・メンバーの生活状況とグラミン銀行とのかかわり

	プログラム・メンバーA	プログラム・メンバーB
＜生活状況＞		
性　別	女性	女性
年　齢	35歳くらい	40歳くらい
家族構成	娘2人（11歳くらい，13歳くらい），老齢の実父	病気の実母（16歳くらいの娘は住み込みのメイドで別居）
扶養家族	3人（娘2人と実父）	1人（実母）
身体的特徴	身体的障害はない	身体的障害はない
身なりの特徴	身ぎれいにしている	身ぎれいにしている
住まいの現状	父の家に同居（屋根はトタンで土間に竹網の壁の1部屋，台所は別棟，家の程度はかなり悪い）	トタンを屋根がわりに置き，側面をトタンで囲んだ小屋（木製の台の上で，老母が横たわっていた）
住まいのあるバリの様子*	父の家と父の息子の家（父の家より少し程度が良い）があるだけの小さなバリ	長兄のとても立派な家の他に，兄弟たちの立派な2軒の家がある大きなバリ
生　業	物乞い	物乞い（時どき他家の家事を手伝い手間賃を得る）
物乞いになった主な理由	12年前に夫から遺棄されたため	20年前に夫から遺棄されたため
物乞いの年数	12年	15年
物乞いに行く頻度	毎日	毎日
最近の1日の稼ぎ	米2キロ**	米1キロ
心配なこと	現在住んでいる父の家は，父の死亡後，父の息子のものになる。そうなれば，住む場所がなくなる。	母の病気
＜グラミン銀行とのかかわり＞		
融資額	300タカ	300タカ
融資の使途	100タカできんまの葉を購入，200タカでニワトリを2羽購入（1羽は120タカ，もう1羽は80タカ）	小さな魚の干物を購入
販売方法	物乞いで戸別訪問する際に販売する（ニワトリは庭で放し飼い）	物乞いで戸別訪問する際に販売する
返済状況	全額返済していない	全額返済していない
メンバーになったきっかけ	一般行員の勧め	近隣の正規メンバーの勧め
メンバー暦	6カ月	6カ月
センター集会参加の有無	毎週参加	毎週参加
センター集会参加の感想	集会はたのしいし，ためになる。最初は，物乞いをしているということで嫌っていた人もいたが，今では受け入れられ，友達もできた。	集会の参加者は，同じ村の女性ばかりで顔を知っているので，安心である。
将来の夢	ニワトリを大きく育て，高く売りたい。そのお金で300タカを返済したい。次の融資で乳牛を飼いたいし，耕地も持ちたい。物乞いをやめることを考えている。	村の人びとは干物を米と交換するが，少ない米の量で多くの干物を手にしているような気がする。だから，適切な量を知りたいと思う。米は市場で売って現金に換えている。それを貯金して，早く返済したい。

（注）*バリとは，中庭を囲んで親族の家々がある共有の屋敷地である。
　　**米2キロを市場で売れば，20～25タカになる。
（出所）筆者作成。

クロ・エンタープライズ・ローンもあり，1件当たり百万タカもの融資が行われ，トラックが購入されている例もある［Grameen Bank 2004, p.9］。

本節は，物乞いがグラミン銀行とかかわることで，どのように選択肢を拡大し，生活の質を高めていくことができるのか，そのエンパワメントの可能性を分析する。第1節および第2節を踏まえながら，正規メンバーとなるまでの期間と限定したうえで考察する。

物乞いとグラミン銀行とのかかわり方は，図1に示したように2通りある。融資を受けるだけの場合と，融資を受けセンター集会にも参加する場合である。センター集会は，エンパワメントに大きな影響を及ぼすため[11]，センター集会に参加する場合としない場合とでは，物乞いのエンパワメントに違いが生じると思われる。さらに，物乞いの特徴として，身体に障害がある人々も多く含まれるため，この点からも彼らのエンパワメントの可能性を捉えたい。以下，エンパワメントの可能性を3つの側面から検討する。

第1は，融資がもたらすエンパワメントの可能性である。①融資の活用に費やすべき時間を物乞いに費やした方が，収入が多い場合もありうる。しかし，金額上少々多く手に入ったとしても，物乞いのみを生業とすることに，経済的発展性は生じない。②他方，物乞いでさえも融資を受け，事業を始めることにより，融資を受けることを自己決定し，融資の活用計画を立て，収入を増やすことができるようになる。③この過程で，商売上の知識が増え，駆け引きも上手くなる。④この全体のプロセスに，自立，エンパワメントの大きな芽がある。

第2は，センター集会がもたらすエンパワメントの可能性である。正規メンバーはセンター集会において，さまざまなことを学習すると共に，人的ネットワークも構築している[12]。6番目のメンバーとして5人グループに加入し，センター集会に出席することにした物乞いの場合は，センター集会がもたらすエンパワメントを享受する可能性がより高くなる。とりわけ，行員と正規メンバーとの対話から受ける影響には強いものがあろう。子どもの教育の大切さを認識する，社会性を身につける，ビジネスおよびその土地の情報を得る，そして友達が増えるなど，これらは物乞いの可能力を一層強めることになる。入ってくる情報量も多くなるだろう。

物乞いは，女性であっても，道すがら多くを見聞きする。そのことは，バリの中で1日の大半の時間を過ごす女性より，情報量が多く，自由のようにも見える。しかしながら，物乞いが新しい知識を得て，それらを自身の生活の質的向上に使っているかは検証されねばならない。

第2節で示した2人のプログラム・メンバーは，近隣の村々まで行き，多くを見聞きしているだろうにもかかわらず，それらを活かすことができず，10年以上も物乞いを続けている。具体的には，プログラム・メンバーBは，魚の干物を購入し，あるいは市場に行き米を売っているが，そうしたことが知識として，魚の干物と米とを交換する際に活用されていない。物乞い達の交換や取引活動で，知識・情報不足のため，不利な立場に立たされたり，騙されたりする可能性は大きいだろう。このような場合，センター集会への参加は，物乞いが彼らの見聞を知識に変えようとする過程に，大い

11）センター集会の教育・訓練機能については，坪井（2002a, pp.83-95）を参照。

12）センター集会において，どのようなネットワークが築かれているかについて，5人グループとセンターのそれぞれのレベル，および5人グループとセンターとの関係において分析した坪井（2002b, pp.2-30）を参照。

なる影響を及ぼすであろう。

第3は，身体に障害のある物乞いにもたらすエンパワメントの可能性である。農村部の物乞いは，都市部の物乞いと違い，1日に何キロも歩く。この生業は，身体に障害のある物乞いにとっても，老齢の物乞いにとっても過酷なものである。とりわけ，前者にとっては相当の身体的苦痛となる。彼らが，融資を元手に露店を開く，あるいは自宅で小売りをするなど，定着型の商売を始めるならば，彼らの苦痛を緩和することができる。一方，障害のある物乞いの手伝い（障害者を乗せた車を引くなどして同伴する）をすることにより手間賃を稼いでいる人々は，商売の鞍替えにより稼ぎを失う可能性もある。しかし，全体としては，農村部の移動型物乞いが定着型自営業に転換することの利益は，特に身体的障害のある場合は大きいと考えられる。

おわりに

以上，物乞いがグラミン銀行とかかわることでもたらされるであろうエンパワメント，すなわち選択肢の拡大と生活の質の向上を，3つの側面から検討した。エンパワメントは，さまざまな要素のシナジー効果によりもたらされるものであり，これら3つの側面は相互依存関係にある。

ここで仮に，所得で物乞いの生活の質を測定するとしよう。都市の物乞いの場合，彼らの1日の稼ぎは，日雇い労働者と同じくらいかそれ以上といわれることが多い。1日の稼ぎの多寡から，物乞いの生活の水準・質は日雇い労働者のそれと同程度かそれ以上といえるのであろうか。所得は手段である。物乞いの生活の良さ（Well-being）を所得のみで説明することは，物乞いでない人々と同様に，全く適切ではない。問題なのは，所得の低さだけでなく，誇りをもてずに物乞いとして生きていく以外に選択肢がない，そのことであろう。

物乞自立支援プログラムは，物乞いに自尊心をもたらし，彼らが人間らしい労働をすることを可能にする。人は「誰でも」より良い生活を達成する意欲と能力を本来備えている。このプログラムは，その発現のための資金と機会を提供する。このことは，公的システムの不備を補完し，対象外としてこれまで一顧だにされなかった人々をも含む，集団的な「人間の安全保障」の1種として，グラミン銀行が適用範囲をさらに下層のなかの下層に向けて拡大したことを意味すると考えられる。ここに，人々を開発するためのグラミン銀行の一貫した役割がある。

このプログラムが物乞いにさまざまな特典（第1節第2項参照）を与えていることで，彼らを慈善の対象としているとして，グラミン銀行の哲学に揺らぎが生じているという議論が生じるかもしれない。しかし，資源（融資）をファンクショニング（機能）に変換する可能力[13]は，人それぞれ違うものであり，彼らはヒエラルキーや偏見といった障害と闘わなければならない人びとである。彼らに社会的な保障を与えようとすれば，資源は多く配分されることになる。つまり，特典は，正規メンバーが達成できるケイパビリティのレベルを物乞いが達成するための特別な配慮，支援であり，グラミン銀行の一貫性を損なうものではない[14]。

最後に，データに基づき，返済率を高め正規メンバーとなり物乞いから脱出する可能性を指摘し

13）松井（2003）では，「ケイパビリティ」概念を「可能力」とすることを提唱している。

14）とりわけ途上国において，全く同じ条件が不平等を強める結果に終わることもあり得るという問題意識は，ヌスバウムの考察からもたらされたものである。具体的にはNussbaum（2000, pp.68-69）を参照した。

ておこう。プログラムが開始されて間もないため，観察の期間は短く，データは乏しい。しかし，表1から見る限り，累積返済額を累積融資額で除した累積返済率は，着実に上昇している。今後，「脱物乞」が増え返済率がさらに上昇するならば，このプログラムはその目標に向かって前進していることになるだろう。プログラムが総体として人々のエンパワメントに役立っていることが分かる。

こうした本稿における考察は，「人間開発」アプローチにより可能となり明確に提示することができるものである。同時に，本論によって，グラミン銀行は最小限アプローチをとる機関か統合アプローチをとる機関か[15]，あるいはマイクロクレジットだけを行うのかマイクロファイナンス機関なのかという分析視角は，その視野，分析アプローチの狭さを示すことになったことは注目に値するであろう。

参考文献

＜日本語文献＞

甲斐田万智子（2001）「北西インドの自営女性労働者協会：最貧困女性のエンパワーメント」西川潤編『アジアの内発的発展』藤原書店.

勝間　靖（1998）「低所得者を対象とした金融機関の発展による零細企業育成と貧困緩和：アプローチをめぐる争点の整理」『国際協力研究』第14巻第1号.

坪井ひろみ（2002a）「非金融プログラムとしてのグラミン銀行：センターレベル集会での借り手教育」『東アジア研究』第1号.

坪井ひろみ（2002b）「グラミン銀行における借り手集団の相互信頼関係：ネットワーク分析」『アジア経済』第43巻第9号.

中村　まり（1999）「バングラデシュにおけるマイクロクレジット政策の理念と現実」『アジア経済』第40巻第9・10号.

西川　麦子（2001）『バングラデシュ／生存と関係のフィールドワーク』平凡社.

野田　真里（2001）「サルボダヤ運動による“目覚め”と分かち合い」西川潤編『アジアの内発的発展』藤原書店.

パウロ・フレイレ（小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳（1979）『被抑圧者の教育学』亜紀書房.

松井　範惇（2003）「可能力，生命活動と基本的請求力」『東亜経済研究』第62巻第1号.

マルクス（大内兵衛・細川嘉六監訳）（1968）『資本論』（第1巻第2分冊）大月書店.

ラヴェル，キャサリン・H.（久木田貴子・久木田純訳）（2001）『マネジメント・開発・NGO：「学習する組織」BRACの貧困撲滅戦略』新評論.

＜英語文献＞

BRAC [2003], *Annual Report 2002,* Dhaka: BRAC.

Grameen Bank [2004], *Annual Report 2003,* Dhaka: Grameen Bank.

Grameen Bank [2005], *At a Glance Struggling Member Programme: Up to May 2005,* Dhaka: Grameen Bank.

Grameen Trust [2004], *Grameen Dialogue No.59,* Dhaka, Grameen Trust.

Nussbaum, M. C. [2000], *Women and Human Development: The Capabilities Approach,* Cambridge University Press.

Yunus, M. and Jolis, A. [1998], *Banker to the Poor,* Dhaka: The

15）最小限アプローチ（Minimalist Approach）とは，金融サービス，とりわけ融資のみに焦点をあてるものであり，統合アプローチ（Integrated Approach）とは，金融サービスと職業訓練，経営指導などの非金融サービスを一括して提供するものである。詳細は勝間（1998, pp.80-82）を参照。

University Press Limited.

Yunus, M. [2004], *Grameen Bank's Struggling (Beggar) Members Programme*, http://www.grameen-info.org/bank/BeggerProgram.html（2004年4月18日）.